羅針盤

大原　國章
Kuniaki Ohara
虎の門病院副院長
Visual Dermatology 編集委員長

皮膚癌の主役は有棘細胞癌

有棘細胞癌はとても多彩です．臨床像も，病理所見も，おそらく発癌メカニズムも．治療方法も手術あり，化学療法あり，放射線治療ありですし，手術にしても悪性黒色腫よりは多様ですし，基底細胞上皮腫よりも大がかりです．発症経過にしても，様々な前癌性病変を母地に持っています．それになにより，表皮の構成成分の主役である有棘細胞の癌であり，いわば皮膚癌の代表格・主人公ともいえます．

ああ，それなのに，悪性黒色腫のような研究の対象にもならず，基底細胞上皮腫のように病理所見を論議されることもなく，ましてや症例報告の材料にもならず，日常業務の中に埋没・処理されている感があります．

そこで，“すべてシリーズ”（第２弾，既刊は，『基底細胞上皮腫のすべて』，本誌 Vol. 7，1 月号）として有棘細胞癌を日なたに出すことにしました．これは同時に，私の過去の経験したうちの代表例を供覧するという意味も込めています．しかし，私一人ですべてを網羅することは到底できるわけがなく，私の未経験な事例などはそれにふさわしい先生方に執筆をお願いしてあります．

Part 1. は母地となる前癌性変化を取り上げました．教科書的には記載があるが実際にはめったに遭遇しない例も含まれていますので，図譜として見ていただくだけでも役に立つだろうと自負しています．私の怠惰のせいで文献的裏付けに乏しく，内容面では個人的感想にとどまっている点はご容赦ください．

Part 2. は，有棘細胞癌の病理像のうちで，特徴的な所見を示すグループをまとめてみました．有棘細胞癌の病理にもいろいろなバリエーションのあることを理解していただけると信じます．

Part 3. は，有棘細胞癌と病理学的な異同・類似が論議される疾患について取り上げています．これも私の個人的意見による記述ですので，読者の方々がさらに勉強を進めるための導入路ととらえてください．

Part 4. は治療で，動注療法，放射線治療といった低侵襲で効果の期待できる治療について，造詣の深い執筆者にお願いしてあります．高齢患者が増えるなかで，きっと日常診療の役に立つはずです．手術についても，術式別に症例を供覧してあります．

外科系の各科が内視鏡手術や遠隔操作に向かっている時勢ですが，そうなると，将来的には患部を直接的に手で触りながら手術するのは皮膚科だけになるかもしれません．皮膚科医だけが，古典的な意味での外科医の伝統を守ることになり，皮膚科医こそが最後の外科医として残る時代が目の前に来ています．皮膚外科の発展を願いながら，手術の項目を書きました．

歴史の悠久を感じつつ，皮膚外科の道は続く
（2011 年 10 月，中国北京市郊外，万里の長城にて）